**Legacy Machine 101**

Legacy Machine 101（レガシーマシーン101、LM101）は、40mmという伝統的なサイズにさまざまな機能を搭載している。 だがそれは、単なる「機能」というよりも、着想から実現までの100年以上にわたる「時」と呼ぶにふさわしい。

腕時計に欠かせない要素は3つある。精度を司るテン輪、巻き上げる必要があるかどうかを知らせる主ゼンマイの巻き上げ残量表示、そしてもちろん時刻だ。Legacy Machine 101は、そうした腕時計の本質を形にし美の領域にまで高めた。

そして表には現れないが、LM101には特筆すべき点がもう1つある。MB&Fが初めて完全自社開発したムーブメントを採用していることだ。

LM101でまず目に入るのは、宙に浮いた大ぶりのテン輪だ。そのゆっくりとした振動は、見る者をさらに近くへといざなう。 そして、繊細なサンレイ模様が刻まれたムーブメントのトッププレートのすぐ上に浮かび上がる、純白の副文字盤が2つ。 右上では、真っ白なバックと美しいコントラストをなすブルーゴールドの針がくっきりと時・分を示しながら、すぐ下の小ぶりでやはり純白の副文字盤は、45時間パワーリザーブ表示に使われている。

ミステリアスな雰囲気を醸し出しているのが、文字盤を保護するその存在を感じさせないサファイアクリスタルだ。エレガントなツインアーチから吊り下げられた心を奪う大ぶりのテン輪にも、指を伸ばせば触れるような錯覚に襲われるだろう。 また、このアーチは金属のブロックをフライス加工したものであり、手作業で5時間以上研磨して鏡のような光沢を生み出している。

Legacy Machine 101を裏返してみよう。ミドルケースの厚みを減らし腕時計が薄く見えるようドーム型にした、文字盤裏のクリスタルを通して、手で優美に仕上げられたムーブメントが姿を現す。 そして、官能的なカーブを描くプレートとブリッジは、アンティークの高級懐中時計が持つスタイルへのオマージュであり、歴史的な血統を受け継いでいることを表している。

うねるようなコート・ド・ジュネーブ仕上げ、手作業で研磨した縁、ゴールドシャトン、ブルー加工した皿ねじを持つLM101のムーブメントは、だが単に往時に忠実なだけではない。 新たな時代の幕開けを告げる存在でもある。それは、構想・設計を自社で完結した初のMB&Fキャリバーなのだ。

ムーブメントの精密な仕上げ仕様と時計史への忠実性は、受賞歴を持つ独立時計師のカリ・ヴティライネンの手による一方、その構造と組立は完全にMB&F製である。

Legacy Machine 101では、まず18金レッドゴールド製と18金ホワイトゴールド製のモデル、次いでフロスト加工を施した2つの限定モデル「Frost」（フロスト）が登場。さらに今回、 ブランド特有の個性的なブルーの文字盤を備えた、33個限定のプラチナ950製モデルが加わった。

**Legacy Machine 101の詳細**

**機構：** Legacy Machine 101のムーブメントは、Legacy Machine No.1（LM1）のものと外見的に似ているが、よく見ればまったく新しいキャリバーであることがわかる。もちろんLM1のムーブメントの小型版だというだけではなく、MB&F社内で構想・設計されたまったく新しいキャリバーなのだ。

あらゆる機械式腕時計のムーブメントにおいて、心臓部と言えるのがテン輪とゼンマイであり、時間間隔の一定したその振動によりムーブメントの精度が調整されている。ブッサーははるか以前から、現代で一般的な4Hz（毎時28,800振動）と比べて、かなり遅い2.5Hz（毎時18,000振動）でゆっくりと振動する、アンティークの懐中時計が持つ大ぶりのテン輪に魅了されていた。そして当然ながら、それがブッサーの原点となった。

だが、ブッサーの手による徹底的な伝統のリメイクには、誰もが目を見張るだろう。ムーブメントの裏側という従来の見えない位置からテン輪を移動し、ムーブメントはおろか文字盤からもさらに高い位置に悠然と浮かせたのだ。

LM101の振動機構は、その位置によってアバンギャルドな趣を醸し出しているかもしれないが、そこには紛れもなく「伝統」も保たれている。それが、MB&Fのために開発された調整ねじ、ブレゲオーバーコイルを使ったヒゲゼンマイ、そして可動式のスタッドホルダーを使った、直径14mmの大きなテン輪だ。

この同じテン輪がLegacy Machine No.1で目を惹くのは確かだが、LM101のさらに小さなケースに収められた姿はさらに大きく見えるだろう。

**文字盤と表示：** LM101を目にした時、まず目を奪うのは空中で時を刻むテンプだ。しかし、時刻とパワーリザーブを表示する純白の文字盤もそれぞれが美を主張し、くっきりとコントラストをなすブルー加工を施した針で高い視認性も確保されている。

宙に浮いているテンプの三次元デザインを引き立てるのが、ムーブメントのすぐ上に浮かぶ、ブルーゴールドに輝く針を持った白い文字盤だ。文字盤はゆるやかなドーム型を描き、「*ストレッチトラッカー*」により半透明の高い光沢を放つ。このストレッチトラッカーとは、ラッカーを幾重にも塗って加熱し、文字盤の表面全体にしっかりと広がる（ストレッチする）ようにした処理のことだ。

そして、文字盤の純粋な美しさを引き立てるべく、底面の洗練された固定部分には目障りなねじを一切使っていない。各文字盤の外周には洗練されたゴールドをあしらい、時代を越えたクラシシズムを優雅に主張している。

**精密仕上げと史実に対する忠実性：** ムーブメントの開発自体は完全に社内で行われたが、ムーブメントでブリッジデザインの歴史的な正確性と精密仕上げを実現する責任を担ったのは、有名な熟練時計師カリ・ヴティライネンだ。

ムーブメントプレート表面（文字盤側）に刻まれた繊細なサンレイ模様は、ある角度でわずかに視線を捉えるが、時刻とパワーリザーブを表示する白い文字盤や、浮き上がったテンプから気を逸らさせることはない。そしてヴティライネンは、ムーブメントの背面から見えるブリッジとプレートのスタイルや仕上げで、歴史的な忠実さを見事に再現した。エレガントにカーブしたブリッジのフォルム、そしてブリッジ間やブリッジとケース間に空けられた伝統的な広い空間がそれだ。

ムーブメントの背面では、つややかに磨き上げられた皿ねじ留めゴールドシャトンに輝く大粒のルビーが、官能的なカーブを描いたブリッジとクロスするコート・ド・ジュネーブ仕上げと、絶妙なコントラストをなして目を引きつける。このルビーのベアリングは、アンティークの高級懐中時計のムーブメントで見られる大粒の宝石がルーツだ。だが実用性も兼ね備えており、大ぶりのカナを支えつつより多くの潤滑油を保持する役割を果たすことによって、摩耗の低減と長寿命化を図っている。

**インスピレーションと実現：** MB&FのLegacy Machineは、マクシミリアン・ブッサーの想像の世界から誕生した。 *「1967年ではなく、1867年に生まれていたら何が起こっていただろう？ 1900年代前半には最初の腕時計が登場したから、手首につける三次元マシーンを創りたいと僕は思うだろう。 その頃は、インスピレーションの源になる「グレンダイザー」も「スター・ウォーズ」も、戦闘機もない。でもその代わり、懐中時計やエッフェル塔はあるし、ジュール・ヴェルヌもいる。それなら、僕が創る20世紀前半のマシーンはどんな姿をしているだろう？* *きっと形は丸く（＝伝統）、三次元をうまく使っていた（＝MB&Fマシーン）はずだ。そうして僕の出した答えが、Legacy Machineだったんだ。」*

18世紀と19世紀の懐中時計に対してマクシミリアン・ブッサーが抱く愛情は、今に始まったことではない。今日見る時計の複雑な機構は、事実上すべてがその時代に考案されただけではなく、洗練されたコンピュータープログラムを使わずに紙とペンだけで生み出された。さらに、現代の水準から考えると非常に未発達な電気を使わない機械を用いて、極めて高精度の部品が製作された上に、今日ですら達成するのが困難な、驚くほど高いレベルの仕上げや組み立て、調整が行われていた。そして、現在の腕時計に比べるとサイズが大ぶりなため、ムーブメントは美しいフォルムのブリッジやプレートが整然と並んだ構造だ。

MB&Fの未来的なHorological Machine（オロロジカルマシーン）は、伝統的な時計学の粋を集めた結晶だが、ブッサーはその豊かな伝統にオマージュを捧げたいと考えていた。100年早くこの世に生を受けていれば、自身で製作していたかもしれない時計に思いを馳せながら。悠然と振動する大ぶりのテンプ、ドーム型の文字盤、伝統的なブリッジデザイン、そして昔ながらの精密仕上げ。その夢は、極めて現代的でありながら伝統のエレガンスを湛え、Legacy Machineとなってここに実を結んだ。

Legacy Machine No.1（LM1）は、Legacyコレクション初のマシーンだった。その他にも、Legacy Machine No.2とLegacy Machine Perpetual（レガシーマシーン パーペチュアル）が制作されている。そしてLM101では、伝統というそのテーマをさらに追求し、他のLegacy Machineの44mmケースに比べより伝統的なサイズの40mmケースを採用している。

**Legacy Machine 101の技術仕様**

**機構：**

三次元オロロジカルムーブメント（MB&F自社開発）

ムーブメントの美的デザインと仕上げ仕様： カリ・ヴティライネン

手動巻き上げ、単一の主ゼンマイ香箱

パワーリザーブ： 45時間

テン輪： ムーブメントと文字盤から浮き上がった、カスタムメイドの14mmテン輪（伝統的な調整ねじ4個付き）

ヒゲゼンマイ：伝統的なブレゲヒゲ（可動式スタッドホルダーで固定）

テンプ振動数： 毎時18,000振動／2.5Hz

部品数： 229個

宝石数： 23石

シャトン：ゴールドシャトン（研磨した皿穴付き）

精密仕上げ：全体で19世紀のスタイルを踏襲した最高級の手仕上げ、傾斜加工を施した内部の縁（手作業）、研磨した縁、コート・ド・ジュネーブ仕上げ、手彫り文字

**機能：**

時、分、パワーリザーブ表示。

大ぶりのテン輪を文字盤上に懸架。

**ケース：**

18金レッドゴールドまたは18金ホワイトゴールド、及びプラチナ950（33個限定）

寸法： 40mm（横）×16mm（高さ）

部品数： 35個

**サファイアクリスタル：**

表面は高いドーム型のサファイアクリスタル、裏面はボックス型のサファイアクリスタル、両面とも反射防止コーティング済み。

**バンドとバックル：**

手縫いのアリゲーターバンド（黒または茶）、ケースにマッチするゴールドまたはプラチナのタングバックル。

**Legacy Machine 101を創った人々**

*コンセプト：* マクシミリアン・ブッサー／MB&F

*製品デザイン：* エリック・ジルー／スルー・ザ・ルッキング・グラス

*技術・製造管理：* セルジュ・クリクノフ／MB&F

*ムーブメントデザインと仕上げ仕様：* カリ・ヴティライネン

*研究開発：*ギヨーム・テヴナン、ルーベン・マルチネズ／MB&F

*ホイール：*ジャン＝フランソワ・モジョン／クロノード

*テン輪ブリッジ：* バンジャマン・シニュード／アムカップ

*テン輪：*ドミニク・ローペ／プレシジョン・エンジニアリング

*プレートとブリッジ：* ロドリゲ・ボーム／ダマテック

*ムーブメント彫金：* エディ・ジャケ、シルヴァン・ベテックス／グリプト

*ムーブメント部品手仕上げ：* ジャック＝アドリアン・ロシャ／C-Lロシャ

*ムーブメント組み立て：*ディディエ・デュマ、ジョルジュ・ヴェジ、アンヌ・ギテ/ MB&F

*社内機械加工：* アラン・ルマルシャン／MB&F

*品質管理：* シリル・ファレ／MB&F

*ケース：* ファビアン・シャパット、リカルド・ペスカンテ／レ・ザルティザン・ボワティエ

*バックル：* エルバS.A.

*文字盤：* マウリツィオ・チェルヴェリエリ／ナテベール

*針：* ピエール・シリエ、イザベル・シリエ、マルコス・ザモーラ／フィドリー

*ガラス：* マルティン・シュテットラー／シュテットラー

*バンド：* オリヴィエ・プルノー／カミーユ・フォルネ

*化粧箱：* オリヴィエ・ベルトン／ATSデベロップマン

*製造物流：* ダヴィド・ラミー、イサベル・オルテガ／MB&F

*マーケティング・広報：* シャリス・ヤディギャログル、ヴィルジニー・メイラン、ジュリエット・ドゥル／MB&F

*M.A.D. Gallery：* エルヴェ・エスティエンヌ／MB&F

*セールス：*ルイ・アンドレ、パトリシア・デュヴィラール、フィリップ・オグル／MB&F

*グラフィックデザイン：*サミュエル・パスキエ／MB&F、アドリアン・シュルツ、ジル・ボンダラス／Z+Z

*製品写真：* マーテン・ファン・デル・エンデ

*人物写真：* レジ・ゴレ／フェデラル

*ウェブサイト：*ステファン・バレ、ヴィクトル・ロドリゲス／スモー・インタラクティブ

*テキスト：*イアン・スケラン／アンダーザダイアル

**MB&F－コンセプトラボの誕生**

***10年の歴史、11種のキャリバー、幾多の達成、無限のクリエティビティー***

2015年、MB&Fは10周年を迎えます。史上初のオロジカル・コンセプトラボが経験した豊かな10年です。MB&Fを一躍有名にした、かの有名なオロロジカル・マシンとレガシー・マシンを構成する11個のキャリバーが象徴する、極限の創造性の10年と言えます。

15年間高級時計ブランドのマネージメントに徹したマキシミリアン・ブッサーは、2005年にハリー・ウィンストンのマネージングディレクターを辞任し、MB&F（マキシミリアン・ブッサー＆フレンズ）を設立。MB&Fは、ブッサー氏が尊敬しコラボレーションを共に楽しむ才能あるオロロジカル職人を集め、先鋭的なコンセプトの腕時計デザインと小規模の製作を行う、アートとマイクロエンジニアリングのラボです。

2007年、MB&Fは初のオロロジカル・マシンHM1を発表。HM1の彫刻のような3次元ケースと美を追求して仕上げられたエンジン（ムーブメント）は、奇抜とも言えるその後の同社オロロジカル・マシンの基準となりました。HM2、HM3、HM4、HM5、HM6、そしてHMX。すべては時刻を告げるためだけのマシンではなく、自らが時を知るマシンなのです。

2011年にはMB&Fはラウンドケースのレガシー・マシン・コレクションを世に送り出しました。MB&Fの視点から言えばよりクラシカルなこのラインアップは、現代的な芸術作品に仕上げる上で、過去の偉大なオロロジカル革新者が生み出した複雑エンジンを新たに解釈し直し、19世紀の優れた時計製造技術を讃えています。LM1とLM2に続いて発表されたLM101は、完全自社開発したムーブメントを搭載している初のMB&Fマシンとなりました。2015年は完全一体型のパーペチュアルカレンダーが特徴のLegacy Machine Perpetualを発表。MB&Fは、現代的かつ非常に斬新なオロロジカル・マシンと、時計製造の歴史をインスピレーションの源とするレガシー・マシンを交互に発表しています。

この10年で、MB&Fの軌跡におけるその革新的な本質を証明する受賞機会もありました。すべてを網羅することはできませんが、2012年の「ジュネーブ時計グランプリ」では、レガシー・マシンNo.1が「パブリック賞（オロロジーファンによる投票）」と「最優秀メンズウォッチ賞（プロの審査員による投票）」を受賞。2010年の同グランプリでは、HM4サンダーボルトで、「最優秀コンセプト＆デザインウォッチ賞」を受賞。そして2015年には、HM6スペースパイレートが、国際的な「レッドドット・デザイン賞」において最高位の「レッドドット：ベスト・オブ・ザ・ベスト賞」を受賞しました。